

児童期の母親の言葉かけと 女子大学生の自尊感情や他者信頼

—具体的な場面での言葉かけと特性に関する言葉かけの影響—

森 下 正 康
(児童学科)

後 藤 早 紀
(児童学科11期生)

本研究は、児童期の母親の言葉かけの種類や内容が子どもの自尊感情や他者信頼の形成にどのような影響を与えるか、を明らかにすることを目的とした。女子大学生を対象として質問紙調査をおこない、280名のデータを分析対象とした。因子分析の結果、児童期における具体的な場面での母親の言葉かけについては「受容的」「否定的」「感謝」の言葉かけの3因子、子どもの特性に関する言葉かけについては「ポジティブ」「ネガティブ」な言葉かけの2因子、現在の自己に関しては「自尊感情」「他者信頼」の2因子が得られた。各因子に対応する尺度を構成し、 α 係数を算出して尺度の信頼性を確認した。パス解析の結果、次のことが明らかとなった。(1) 児童期の母親の「ポジティブ」な言葉かけは、子どもの「自尊感情」と「他者信頼」を高めていた。それに対して、児童期の母親の「ネガティブ」な言葉かけは、「自尊感情」と「他者信頼」を低下させていた。(2) 児童期の「ポジティブ」な言葉かけは「受容的」言葉かけを高め、「ネガティブ」な言葉かけは「拒否的」言葉かけを高めていた。(3) また、「ポジティブ」な言葉かけは「感謝」の言葉かけを高め、「ネガティブ」な言葉かけは「感謝」の言葉かけを低下させていた。そして、「感謝」の言葉かけは「他者信頼」を高めていた。分散分析の結果、「受容的」言葉かけや「感謝」の言葉かけが多い場合に、「ネガティブ」な言葉かけあるいは「否定的」言葉かけが多いとき、「他者信頼」得点が高いことが注目された。以上の結果から、子どもの自尊感情や他者信頼に対して、特性に関する言葉かけの影響のほうが具体的な場面での言葉かけの影響よりも大きいことと、両方の言葉かけのパターンが影響していることが示唆された。

キーワード：言葉かけ、自尊感情、他者信頼、母子関係

問 題

本研究は自尊感情や自己受容の形成に焦点を当てた。自尊感情は、一般に自己に対する肯定的または否定的な態度としてとらえられている(櫻井, 2000)。最近、自分の将来や人間関係に不安を抱えている子どもたちが多いということや、子どもたちの自尊感情が乏しいことなどが指摘されている(中央教育審議会, 2008; 古荘, 2009; 村崎・笹山, 2013)。西田(2012)によれば、日本の高校生の自尊感情は、米中韓の半分以下の水準であり、小学校中学年から下がりをはじめ、その後低下し続けることが示されている。

自尊感情を支えるもの

このような、子どもたちの自尊感情の低下の原因はどこにあるのだろうか。園田(2005)は「心の居場所」の無さが、自己喪失・自己差別などの自尊感情に関連すると述べている。そして、日本の子どもたちが、安心できる「居場所感」や「幸福感」をもちにくい状態にあることが指摘されている(加藤・中島, 2010)。また、自尊感情が保てないまま大人になる子どもたちが、自尊感情が低いまま親になることの危惧が指摘されている(下村, 2011)。

加藤・中島(2010)によると、自尊感情の高

い子どもの母親は子どもとともにいることや活動することに対して積極的であるのに対して、自尊感情の低い子どもの母親は子どもと関わることにし消極的であった。彼らは、自尊感情を育むためには、ありのままの自分を「これでよい」と実感することのできる環境が必要不可欠であるとしている。中間(2007)は、子どものコンピテンスの感覚が自尊感情を支え、自信をもって行動する基盤になるという。そのコンピテンスの感覚を確かなものとするのは、他者からの賞賛や承認、励まし、評価、共感であるとする。同じように、柏木(2008)も、身近な人が自分をどう評価しているか、その人からどう遇されているかは、自分のイメージに対する重要な材料になると指摘している。

エリクソンの発達段階において児童期特有の課題は「勤勉 対 劣等感」であり、それにうまく応えられるかが大切だとされている(小嶋・森下, 2009)。この時期に他者から受ける評価や言葉かけは、自尊感情の形成や劣等感の形成に重要な役割を果たす。そこで、本研究においては、母親からの子どもに対する言葉かけに焦点をあてたい。

母親の言葉かけと自尊感情・他者信頼

これまで、母親の言葉かけの特徴が子どもの自尊感情にどのような影響を与えるかについての研究は少ない。真栄城・酒井・上長(2014)によると、41カ月時点での観察による親の肯定的フィードバックと、1年後の子どもの自尊感情得点の間には正の相関がみられた。永田・三崎・森(2004)によれば、小学生時代の母親や教師からの「ほめ」に関する満足度が高い大学生ほど、「自分らしい生き方を大切にしている」や「自分の気持ちや考えを大切にしている」という得点が高かった。さらに、森下・藤田(2012)は、小学5、6年生を対象にした研究において、食事場面のなかで母親から食べ物への「感謝」や子どもへの「共感」の言葉かけが多く「拒否」の言葉かけが少ないほど、「食卓の雰囲気」が楽しく、その楽しい「食卓の雰囲気」を介して子どもの「自尊感情」と「他者受容」を高めているということを示している。

自尊感情は自己に対する肯定的な態度であり、自己をありのままに受け入れる自己受容や、自己に対する信頼(自己信頼)と関連が深い。また、自己受容と他者受容には正の相関があり、自己を受け入れる態度と他者を受け入れる態度との間に密接な関連があることがわかっている(川岸, 1972)。さらに、天貝(1995)は、自己に対する信頼感是人一般に対しての肯定的な概念を形成すると述べている。したがって、母親からの言葉かけの影響は、子どもの自尊感情に影響するだけでなく、他者に対する信頼感にも影響するだろう。

言葉かけの様式

友利ほか(2004)は、親のために、子どもの自尊感情を育てるためのしつけの方法について米国の育児書を抄訳している。そのなかで、しつけの基本や肯定的・否定的フィードバックの与え方などのコミュニケーションスタイルについて、事例を交えて紹介している。それらは必ずしも実証的研究ではないが、親からの言葉かけに関して参考になる。

子どもに対する評価に関する言葉かけは、具体的な場面での子どもの行為そのものに対する言葉かけと、一般的な子どもの特徴(特性)に関する言葉かけ、の二つに分類することができる。ギノット(1973)は、子どもをほめるなら、子どもの努力や、それによってなしとげられたことをほめること、子どもの性格や人格を問題にしてはならないと述べている。性格や人格についてほめられると、その評価や期待に応え続けることへの不安が生じ、子どもはむしろそれとは反対の行為をとるようになるという。たしかに、具体的な場面での母親からの言葉かけは、子どもの努力や行為に対するものなので、子どもに具体的にストレートに伝わり、与える影響は大きいかもしれない。

それに対して、具体的な場面での言葉かけの背景に親の態度があり、その態度のほうが具体的な言葉かけよりも自己制御に影響しているという知見がもたらされた(森下・前田, 2015)。このような文脈からは、子どもの性格や人格(特性)に関する評価のなかに子どもに対する

基本的な態度や評価が含まれており、それが具体的な場面での言葉かけに影響していると考えられる。したがって、具体的な場面での言葉かけの背景にある、子どもの特性に関する言葉かけのほう子どもへの影響は大きいと予想される。

具体的な場面での言葉かけと子どもの特性に関する言葉かけの、どちらが自尊感情や他者信頼の形成に大きな影響を与えるかについて、これまで実証的研究はみられない。そこで、本研究では、この点についても明らかにしたい。

すでにみてきたように、自尊感情は自分を大切に思える感情であり、自分が重要だと考える側面での有能性と、それを支持する身近なおとなや仲間の評価を基盤に形成されている（小嶋・森下，2009；中間，2007）。以上の点を基本におきながら、次のような仮説を設定した。

仮説：児童期に母親から具体的な場面での受容的な言葉かけや特性に関するポジティブな言葉かけが多いほど、子どもの自尊感情や他者信頼は高くなり、その反対に否定的な言葉かけやネガティブな言葉かけが多いほど、子どもの自尊感情や他者信頼は低くなる。

方法

1 調査対象

女子大学の学生288名を対象に質問紙への評定を求めた。そのなかから2項目以上の記入漏れのあるものを除いた280名のデータを分析の対象とした。内4名は1カ所の記入漏れがあり、評定の中間の得点を入力して分析の対象とした。対象者の内訳は、児童学科212名（1回生29，2回生67，3回生81，4回生35），英文学科68名（3回生）であった。

2 調査期間 平成26年7月上旬

3 手続き

1・2・3回生には、授業中に質問紙を配布し、児童期の母親の言葉かけ、現在の自分の自尊感情と他者信頼について無記名で回答してもらい、1回生は後日提出、2・3回生はその場で回収した。4回生には、同様の質問紙を配布して回答してもらい、その場で回収した。

4 測定尺度

(1) 児童期の母親の言葉かけ

小学生のころに受けた言葉かけを想定し、ある具体的な場面での子どもに対する言葉かけと、子どもの特性に関するものとに分けて新しい尺度を作成することとした。項目作成には、6名の発達心理学専攻生の協力を得た。具体的な場面での言葉かけについて、まず日常よくある場面を想定し、その場面での子どもに対する母親の受容的な言葉かけや否定的な言葉かけを各3項目ずつ想定して作成した（表1）。

表1 母親の具体的な場面での言葉かけ項目

-
- | | |
|------------------|-------------------|
| 1 『手伝いをした時』 | 1. 手伝ってくれてありがとう。 |
| | 2. 手伝ってくれて助かるわ。 |
| | 3. かえって邪魔になるわ。 |
| 2 『食器を割った時』 | 1. 手間が増えたわ。 |
| | 2. 大丈夫、けがしなかった。 |
| | 3. 何をしているの。 |
| 2 『テストで良い点をとった時』 | 1. すごいね。 |
| | 2. これくらいはあたり前だよ。 |
| | 3. 頑張ったね。 |
| 3 『テストで悪い点をとった時』 | 1. あそんでばっかりいるからよ。 |
| | 2. あほやな。 |
| | 3. 次は頑張ろうね。 |
| 4 『門限より遅くなったとき』 | 1. 何かあったの。 |
| | 2. 約束を守りなさいよ。 |
| | 3. 心配したよ。 |
-

子どもの特性に関する言葉かけは、日常的に子どもの特徴について母親がかかる言葉かけとし、評価的な観点からポジティブな内容とネガティブな内容を想定して作成した（表3参照）。例えば、ポジティブな言葉かけは「優しい」「思いやりがある」など子どもに関する肯定的な言葉かけで、ネガティブな言葉かけは「うそつき」「わがままだ」などの子どもに関する否定的な言葉かけであった（表3）。

小学生のころの母親または母親に代わる人に

ついて回想してもらい、そのような言葉かけの頻度について、「全然なかった」「たまにあった」「ときどきあった」「よくあった」「とてもよくあった」の5件法で評定を求めた。

(2) 自尊感情

女子大学生の自尊感情を測定するため、山本・松井・山成(1982)の「自尊感情尺度」から7項目、平石(1990)の「自己肯定意識尺度」から2項目を使用した。現在の自分に関してどのように捉えているかについて、「あてはまらない」「どちらかといえばあてはまらない」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまる」「あてはまる」の5件法で評定を求めた。

(3) 他者信頼

女子大学生の他者への信頼感を測定するため、天貝(1995)の「信頼感尺度」から5項目、谷(1996)の「基本的信頼感尺度」から3項目を使用した。現在の自分に関してどのように捉えているかについて、「あてはまらない」「どちらかといえばあてはまらない」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまる」「あてはまる」の5件法で評定を求めた。

結 果

1 尺度の因子分析

それぞれの尺度項目について因子分析をおこなった。まず主成分分析をおこない、固有値の変動(スクリープロット)と説明された分散の値を参考にして因子数を決定した。次に最尤法による因子分析をおこない、最終的にプロマックス回転をおこなった(足立, 2006)。次に、各因子に対応する尺度を構成し、因子に高く負荷する項目の粗点の和を尺度得点とした。各尺度について α 係数を算出した。

児童期の母親の言葉かけ

(1) 具体的な場面での言葉かけ

具体的な場面での言葉かけについて、因子分析の結果、3因子が得られた。第1因子は、「頑張ったね」「すごいね」「次は頑張ろうね」という項目に負荷が高く、子どもを肯定的に受け入れる「受容的」因子と命名した。第2因子

は、「あそんでばかりいるからよ」「手間が増えたわ」「あほやな」という否定的な内容の「否定的」因子とした。第3因子は、「手伝ってくれて助かるわ」や「手伝ってくれてありがとう」という感謝を表す「感謝」因子とした。 α 係数は高い値を示した(表2)。

(2) 子どもの特性に関する言葉かけ

因子分析の結果、2因子が得られた。第1因子は、負荷の高い項目内容は「信頼しているよ」「思いやりがある」「優しい」などで、肯定的で受容的な内容から「ポジティブ」な言葉かけ因子と命名した。第2因子は「ばかだ」「しつこい」「わがままだ」という否定的で拒否的内容であったので「ネガティブ」な言葉かけ因子と命名した。 α 係数は高い値を示した(表3)。

自尊感情と他者信頼

因子分析の結果、3因子が得られた。第1因子は、「私は色々な良い素質をもっている」「だいたいにおいて、自分に満足している」という項目に負荷が高く、「自尊感情」因子と命名した。第2因子は、「私には頼りにできる人がほとんどいない(逆転項目)」や「私は現実に信頼できる人がいる」「私は多少のことがあっても、周りの人との信頼関係を保っていけると思う」という他者への信頼に関する内容であったため、「他者信頼」因子と命名した。第3因子は、「私には私なりの人生があってもいいと思う」「周囲の人によって自分が支えられていると感じる」などの3項目に負荷が高く、一応「自己肯定」因子と命名した。 α 係数は、「自尊感情」と「他者信頼」尺度は高い値を示した(表4)。しかし、「自己肯定」尺度の α 係数は.531と低かったため、以下の分析では扱わないことにした。

各尺度の得点分布と尺度間相関

尺度得点の分布は、「自尊感情」「他者信頼」「ポジティブ」尺度に関してはほぼ正規分布を示していた。「受容的」と「感謝」尺度は高い得点の方向に、「ネガティブ」と「否定的」尺度は低い方向に得点分布がずれていた。

「自尊感情」と「他者信頼」には中程度の正の相関がみられた。「受容的」言葉かけは「否

表2 母親の【具体的な場面での言葉かけ】の因子パターン

項 目	因子負荷量			共通性
	1	2	3	
第1因子【受容的】				
3-3 頑張ったね。	.801	-.030	-.013	.641
3-1 すごいね。	.756	-.093	.011	.616
4-3 次は頑張ろうね。	.609	-.070	.014	.401
5-1 何かあったの。	.576	.227	.039	.356
5-3 心配したよ。	.566	.079	.115	.389
2-2 大丈夫、けがしなかった。	.405	-.128	.231	.364
第2因子【否定的】				
4-1 あそんでばかりいるからよ。	.044	.607	.059	.354
2-1 手間が増えたわ。	.117	.598	-.212	.408
2-3 何をしているの。	.007	.564	-.017	.321
1-3 かえって邪魔になるわ。	.111	.551	-.265	.382
4-2 あほやな。	-.120	.534	.173	.299
2-2 これくらいは当たり前だよ。	-.246	.525	.187	.336
6-2 .約束を守りなさいよ。	.147	.308	.073	.108
第3因子【感謝】				
1-2 手伝ってくれて助かるわ。	.159	.093	.756	.705
1-1 手伝ってくれてありがとう。	.148	.001	.715	.647
寄与	3.351	2.239	2.468	
α 係数	.822	.720	.814	

表3 母親の【特性に関する言葉かけ】の因子パターン

項 目	因子負荷量		共通性
	1	2	
第1因子【ポジティブ】			
1. 信頼しているよ。	.790	-.045	.621
2. 思いやりがある。	.764	-.011	.583
3. 優しい。	.759	-.081	.573
4. いい子。	.749	-.042	.557
5. 愛嬌があるね。	.712	.070	.519
6. 明るい子。	.698	.021	.490
7. だいすき。	.693	-.135	.484
8. 素直だ。	.685	.039	.475
9. かわいい。	.665	-.092	.442
10. 物わかりがいいね。	.611	.111	.395
11. おもしろい子。	.606	.184	.418
12. 賢い。	.564	-.031	.317
13. 個性があっていいね。	.555	.152	.344
14. 器用だ。	.467	-.081	.219
第2因子【ネガティブ】			
15. つまらない子。	-.048	.632	.397
16. 何をしても失敗するよね。	-.082	.615	.377
17. ばかだ。	-.015	.582	.337
18. しつこい。	.030	.581	.341
19. 信じられないわ。	-.012	.549	.300
20. わがままだ。	.079	.541	.305
21. いじわる。	.043	.531	.287
22. うそつき。	.033	.463	.218
23. 自分らしさがない。	.072	.457	.219
24. 無愛想だ。	-.130	.352	.134
寄与	6.375	3.033	
α 係数	.918	.798	

表4 女子大学生の自尊感情と他者信頼の因子パターン

項目	因子負荷量			共通性
	1	2	3	
第1因子【自尊感情】				
1. 私は色々な良い素質をもっている。	.783	-.170	.141	.549
2. だいたいにおいて、自分に満足している。	.744	-.009	-.069	.528
3. 自分には、自慢できることがあまりない。	-.729	-.049	.137	.539
4. 自分の個性を素直に受け入れている。	.655	-.124	.102	.388
5. 少なくとも人並みには、私は価値のある人間である。	.642	-.064	.181	.449
6. 自分は全くだめな人間だと思うことがある。	-.606	-.200	.355	.500
7. 私は物事を人並みには、うまくやれる。	.534	.093	-.051	.333
第2因子【他者信頼】				
8. 私には頼りにできる人がほとんどいない。	.021	-.720	-.135	.605
9. 私はなぜか人に対して疑い深くなってしまう。	-.095	-.571	.176	.327
10. 相手が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益があるからだと思う。	.180	-.564	.145	.202
11. 私は現実に信頼できる人がいる。	-.003	.545	.381	.624
12. 自分が困ったときは、まわりの人々からの援助が期待できる。	.112	.465	.264	.477
13. 私は多少のことがあっても、周りの人との信頼関係を保っていけると思う。	.329	.421	-.001	.434
14. 一般的に、人間は信頼できるものだと思う。	.028	.327	.215	.229
第3因子【自己肯定】?				
15. 私には私なりの人生があってもいいと思う。	.310	-.194	.591	.402
16. 周囲の人によって自分が支えられていると感じる。	-.075	.112	.556	.355
17. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。	-.215	-.061	.541	.273
寄与	4.227	3.512	2.181	
a 係数	.843	.787	.531	

表5 尺度間の相関

	自尊感情	他者信頼	受容的	否定的	感謝	ポジティブ	ネガティブ
自尊感情	—	.432**	.216**	-.002	.208**	.370**	-.115
他者信頼	.432**	—	.174**	-.032	.265**	.217**	-.214**
受容的	.216**	.174**	—	-.099	.566**	.630**	.002
否定的	-.002	-.032	-.099	—	-.079	-.004	.569**
感謝	.208**	.265**	.566**	-.079	—	.570**	-.082
ポジティブ	.370**	.217**	.630**	-.004	.570**	—	.070
ネガティブ	-.115	-.214**	.002	.569**	-.082	.070	—

定的」言葉かけと相関がないが、「感謝」の言葉かけの間には高い正の相関があった。「ポジティブ」な言葉かけは「受容的」「感謝」の言葉かけと正の相関が高く、「ネガティブ」な言葉かけは「否定的」言葉かけと高い正の相関があった。

2 パス解析

仮説を検証するために、Amosによりパス解

析をおこなった。(小塩, 2008; 豊田, 2007)。仮説に沿ってパスモデルを作成した。その際、「受容的」な言葉かけと「感謝」の言葉かけについて、「ポジティブ」な言葉かけと「ネガティブ」な言葉かけ以外に、共通の要因が影響していると考えて誤差間に双方向のパスを入れた。また同じような理由から、「自尊感情」「他者信頼」の誤差間にもパスをいれた。

パス解析をおこない、パス係数の有意でない

ものから一つずつ減らしていった。またさまざまな角度からパスモデルを作成して分析した結果のうち、最も適合性の高いモデルが図1であった。パス係数はすべて5%レベルで有意で、適合性の指標はいずれも高い値を示していた。

パス解析の結果、次のことが明らかとなった。児童期の母親の「ポジティブ」な言葉かけは母親の「受容的」言葉かけと「感謝」の言葉かけをそれぞれ高めていた。また、「ポジティブ」

な言葉かけは子どもの「自尊感情」「他者信頼」を直接高めていた。母親の「ネガティブ」な言葉かけは母親の「否定的」な言葉かけを高め、さらに、子どもの「自尊感情」「他者信頼」を直接低下させていた。母親の「感謝」の言葉かけは子どもの「他者信頼」を高めていた。しかし、母親の「受容的」「否定的」な言葉かけは子どもの「自尊感情」「他者信頼」のいずれにも有意なパスを示さなかった。

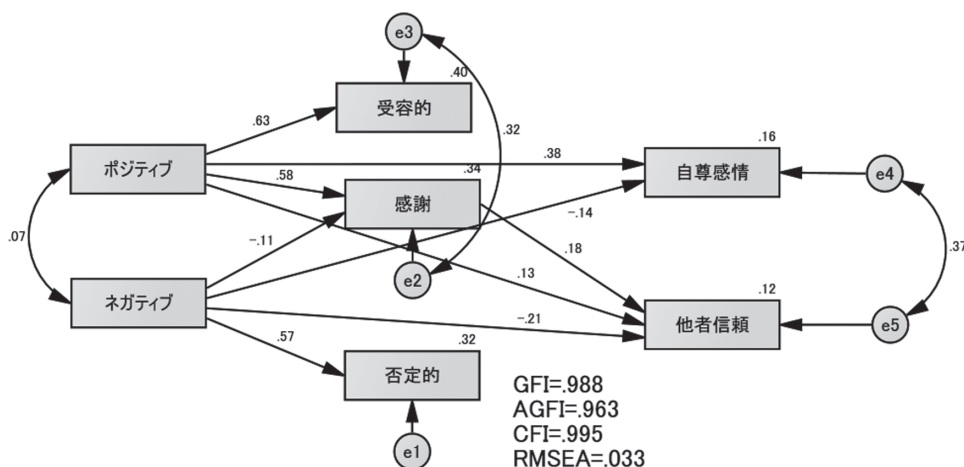


図1 母親の言葉かけ—自尊感情・他者信頼のパスモデル

3 分散分析

パス解析では直線回帰を想定しているため、説明変数間に交互作用がある場合、必ずしも有意なパスを示さないことがある。そこで、児童期の母親の言葉かけが、自尊感情等にどのような影響を与えるかをより明らかにするために分散分析をおこなった。「ポジティブ」「ネガティブ」な言葉かけと「受容的」「否定的」「感謝」の言葉かけ5つの要因をそれぞれ二つずつ組み合わせ、「自尊感情」他者信頼」をそれぞれ従属変数として、 2×2 の分散分析をおこない、交互作用に注目した。交互作用があった場合にはBonferoniの方法(石村, 2006)によって多重比較をおこなった。

自尊感情

(1) 「ポジティブ」と「受容的」の要因間に有意な交互作用 ($F(1,276)=4.734, p<.05$) がみ

られた。その後の検定をおこなった結果、受容HにおいてもL群においても、ポジティブH群のほうがL群よりも自尊感情得点が有意に高かった(図2)。また、ポジティブH群では受容的H群のほうがL群よりも自尊感情得点が高い傾向があった。つまり、一般にポジティブな言葉かけが多い群のほうが低い群よりも自尊感情得点が高く、さらに、母親からポジティブな言葉かけと受容的な言葉かけが多いHH群は自尊感情得点が高いということが明らかとなった。他者信頼

(3) 「否定的」「感謝」の要因間に有意な交互作用 ($F(1,276)=6.428, p<.01$) がみられた。その後の検定をおこなった結果、「否定的」H群でもL群でも、「感謝」H群のほうがL群よりも他者信頼得点が有意に高かった。また、感謝Hでは、否定的H群のほうがL群よりも他者信

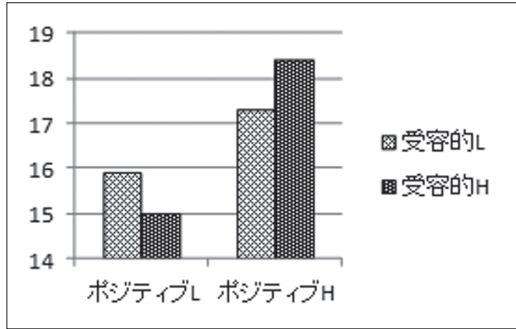


図2 ポジティブ×受容的と「自尊感情」

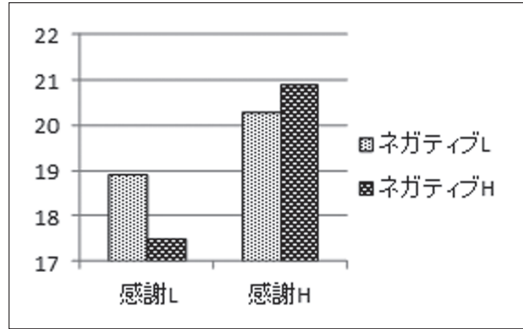


図4 感謝×ネガティブと「他者信頼」

頼得点が高かった（図3）。つまり、一般に感謝の言葉かけの多い群のほうが少ない群より他者信頼が高かった。さらに否定的な言葉かけも感謝の言葉かけもともに多いHH群は他者信頼得点が非常に高いということが明らかとなった。

(4) 「ネガティブ」と「感謝」の要因間に有意な交互作用 ($F(1,276)=4.501, p<.05$) がみられた。その後の検定をおこなった結果、「ネガティブ」H群でもL群でも、「感謝」H群の方がL群よりも「他者信頼」得点が有意に高かった。また、「感謝」L群ではネガティブH群の方がL群よりも「他者信頼」得点が低かった（図4）。つまり、母親の感謝の言葉かけが多いほうが少ない群より他者信頼得点が高いということ、感謝の言葉かけが少なくネガティブな言葉かけが多いLH群は他者信頼得点が著しく低いということが明らかとなった。

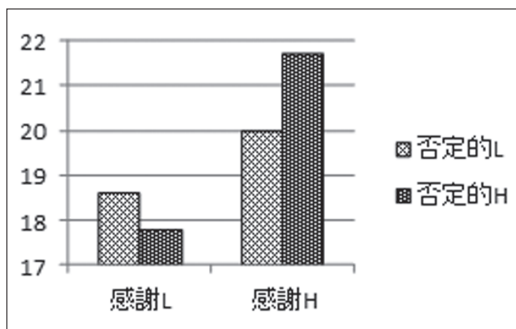


図3 感謝×否定的と「他者信頼」

考察

本研究は、児童期の母親の言葉かけが子どもの自尊感情や他者信頼の形成にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とした。

言葉かけの種類と内容

パス解析の結果、子どもの特性に関する「ポジティブ」な言葉かけは、具体的な場面での「受容的」言葉かけと「感謝」の言葉かけを高めていた。他方、特性に関する「ネガティブ」な言葉かけは具体的な場面での「拒否的」言葉かけを高め、「感謝」の言葉かけを低下させていた。

いろいろなパスモデルを構成するなかで、この方向のモデルのパス係数の値は、それとは反対の方向のパス係数の値よりも高く、モデルの適合性も高いということがわかった。したがって、子どもの性格特徴に関する認識が、具体的な場面における言葉かけに影響する可能性が高い。このような結果は、一般的な養育態度が具体的な言葉かけを規定しているという研究結果（森下・前田, 2015）と一致している。

パス解析にみる言葉かけの影響

児童期の母親の「ポジティブ」な言葉かけは、子どもの「自尊感情」を高め、「ネガティブ」な言葉かけは「自尊感情」を低下させていた。しかし、具体的な場面における「受容的」「否定的」はいずれも「自尊感情」に影響していなかった。「感謝」の言葉かけのみが「他者信頼」を高めていた。

「自尊感情」尺度と「他者信頼」尺度の間には中程度の正の相関がみられたが、結果に若干

の違いがみられた。「他者信頼」については、児童期の母親の「ポジティブ」な言葉かけは、子どもの「他者信頼」を高め、「ネガティブ」な言葉かけは「他者信頼」を低下させていた。この点は「自尊感情」と同結果であったが、次の点が異なっていた。「ポジティブ」な言葉かけは「感謝」の言葉かけを高めそれを介して「他者信頼」を高め、「ネガティブ」な言葉かけは「感謝」の言葉かけを低下させそれを介して「他者信頼」を低下させていた。パス係数を比較すると、「他者信頼」には「ネガティブ」な言葉かけの少なさの影響が比較的強く、「自尊感情」には「ポジティブ」な言葉かけの多さの影響が強かった。また、「他者信頼」の形成には「感謝」の言葉かけが重要だということが示唆された。

つまり、ネガティブな言葉かけが多く感謝の言葉かけが少ないほど「他者信頼」を強く低下させるということを示していた。ネガティブな言葉かけが多く感謝の言葉かけの少ないことが、母親との信頼関係を低下させ、それを媒介にして他者信頼を低下させるのではないか。他方、自尊感情には母親から肯定的なポジティブな評価が重要だといえるだろう。

子どもの特性に関する母親からのポジティブあるいはネガティブな言葉かけは自尊感情や他者信頼に影響しており、具体的な場面における受容的な言葉かけや否定的な言葉かけは影響していなかった。したがって、仮説は部分的に支持されたといえる。上記のように、具体的な場面での言葉かけの背景にある子どもの特性についての認識や言葉かけが、子どもに強い影響を与えるということが示唆された。

分散分析にみる言葉かけの影響

分散分析の結果、母親から「ポジティブ」な言葉かけと「受容的」言葉かけの多い群は、「自尊感情」得点が高かった。このような結果は、「受容的」言葉かけ単独では効果がなくても、「ポジティブ」な言葉かけと合わさると、より「自尊感情」を高めるということを示している。また、「感謝」の言葉かけが少なく「ネガティブ」な言葉かけが多い群は、「他者信頼」

得点が著しく低かった。この結果は、パス解析の示すところと一致している。

それに対して、パス解析の結果ではみられない、次のような新しい発見があった。一般に感謝の言葉かけが多い群のほうが「他者信頼」が高いという結果のなかで、感謝の言葉かけと否定的な言葉かけの多い群は「他者信頼」得点が非常に高いという結果であった。つまり、「感謝」の言葉かけの多いなかで「否定的」な言葉かけがあるほうが他者信頼を高めると解釈される。

これは予想していなかった結果である。「否定的」言葉かけは、「感謝」の言葉かけや「受容的」言葉かけと相関はなかった。したがって日常場面での「否定的」言葉かけは、特に拒否的な母親の態度を反映したものではないようである。したがって、手伝いなどをしたときに「感謝」の言葉かけをきちんとするが、注意すべき時には注意するというような否定的な言葉かけがある親子関係のなかで、親子の信頼関係が形成され、他者信頼が形成されるのかもしれない。

しかし、「感謝」の言葉かけが少なく「ネガティブ」な言葉かけが多い群は「他者信頼」が非常に低いという結果であった。そのような感謝の言葉かけが少ないなかでは、ネガティブな言葉かけは他者信頼を形成しないといえるだろう。こちらの結果は、パス解析の結果から推測される結果と一致するものであった。

以上、分散分析の結果では、具体的な場面での言葉かけ要因どうしや、子どもの特性に関する言葉かけ要因との間に有意な交互作用がみられた。したがって、子どもの特性に関する言葉かけの影響という大きな流れのなかで、具体的な場面でのことばかけも子どもの自尊感情や他者信頼に微妙な影響をもたらすといえるだろう。

今後の課題

まず、父親の言葉かけの影響はどうか、女子学生だけでなく男子学生の場合はどのような結果になるか、検討すべき課題が残されている。また、対象が大学生ではなくて、幼児、児童、中学生や高校生の場合はどうなるか、発達的に検討すべき課題でもある。さらに可能であれば、

言葉かけと自尊感情・他者信頼の形成に関する縦断的な研究が望まれる。また、母親からの言葉かけ尺度について、特に具体的な場面での言葉かけに関してより信頼性と妥当性の高い尺度の開発も残された課題である。

引用文献

- 足立浩平 (2006). 多変量データ解析法—心理・教育・社会系のための入門— ナカニシヤ出版
- 天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
- ハイム・ギノット (森 一祐 翻訳) (1973). 親子の心理学—躰を考えなおす12章 小学館
- 平石賢二 (1990). 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康 教育心理学研究, 38, 320-329.
- 古荘純一 (2009). 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか 光文社新書
- 石村貞夫 (2006). SPSSによる分散分析と多重比較の手順 (第3版) 東京図書
- 柏木恵子 (2008). 子どもが育つ条件—家族心理学から考える 岩波新書
- 加藤悠・中島美那子 (2010). 母親の自尊感情と養育態度—子どもの自尊感情を育むために— 茨城キリスト教大学紀要 (人文科学), 45, 119-129.
- 川岸弘枝 (1972). 自己受容と他者受容に関する研究: 受容尺度の検討を中心として— 教育心理学研究, 20, 17-178.
- 小嶋秀夫・森下正康 (2009). 児童心理学への招待 [改訂版] 学童期の発達と生活 サイエンス社
- 眞榮城和美・酒井彩子・上長然 (2014). 親子の相互作用に関する観察評定マニュアル日本語版の作成: 親の評価的フィードバックと子どもの自尊感情の関連から 清泉女学院大学人間学部研究紀要, 11, 49-58.
- 森下正康・藤田のゆり (2012). 食卓の雰囲気と母親の言葉かけの特徴が児童の偏食におよぼす影響 京都女子大学発達教育学部紀要, 8, 117-126.
- 森下正康・前田百合香 (2015). 児童期の母親の養育態度としつけ方略が自己制御機能の発達に与える影響 京都女子大学発達教育学部紀要, 11, 103-112.
- 村崎良平・笹山竜太郎 (2013). 児童の自尊感情を高める教育的実践研究 教育実践総合センター紀要, 12, 317-325.
- 永田良太・三崎千尋・森敏昭 (2004). 子どもへの言葉かけに関する研究—「ほめ」と「叱り」に着目して— 学校教育実践学研究, 11, 37-44.
- 中間玲子 (2007). 自尊感情の心理学 児童心理 61(10), 884-889. 金子書房
- 西田依子 (2012). 小学生の自尊感情を育む学級経営のあり方: 自尊感情が低下する中学年を中心に 教師教育研究, 8, 163-172.
- 小塩真司 (2008). 初めての共分散構造分析: Amosによるパス解析 東京書籍
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- 下村英雄 (2011). 若年者の自尊感情の実態と自尊感情等に配慮したキャリアガイダンス 独立行政法人 労働政策研究・研修機構
- 園田雅春 (2005). 子どもの自尊感情形成過程における状況性の考察 甲子園短期大学紀要, 23, 57-62.
- 谷冬彦 (1996). 基本的信頼感尺度の作成 日本心理学会第60回大会発表論文集, 310.
- 豊田秀樹 (2007). 共分散構造分析 [Amos編] 東京書籍
- 友利久子・嘉数朝子・大城一子・仲程恵理子・金武朝成・中村美鈴 (2004). 資料「子どもの自尊感情の発達と親子のコミュニケーションスタイル」—米国の育児書の紹介— 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要, 6, 111-133.
- 中央教育審議会答申 (2008). 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について 文部科学省
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.